

小波日記掲載中断の記

竹田 修^E

小波の日記を読み解く同じ作業をしている人達が居ることを知ったのは『図書の譜』2号が出た直後4月早々であった。発表後次号へむけて明治25年4月から読みすすむ一方、小波関係の資料を当たっている時出会ったのが桑原三郎、松井千恵監修『巖谷小波「十亭叢書」の註解』（ゆまに書房1994年刊）である。これは小波の少年期の習作とも云うべき最初期の毛筆書草稿を、所蔵する白百合女子大学の研究グループが解説したもので、そのなかに「これより以前…略…巖谷小波の日記のコピーを読む会を、週一回ずつ重ねて来た。明治二十年の分（丁亥日録）を丁度読み終えた所であった。私共はこの研究会を、平成五年度から「十亭叢書」を読む会に切り替えて…後略…」とあるのが事のはじまりである。

『図書の譜』への掲載許可を巖谷家へお伺いした時、そのような作業のあることを知らされることもなく、日記のコピーが他にあることさえ考えなかった者には平成5年以後の進捗状況が先ずはの関心事であった。その辺りの事情を知りたく、紀要を送り照会した結果、5月6日、猪狩先生（白百合女子大学助教授）から和泉図書館へ電話があり、明治27年まで解説が終わって刊行されていることの知らせと、今後の作業方針についての相談をいただいた。

追いかけて送付されたのが、桑原三郎監修『巖谷小波日記〔自明治二十年至明治二十七年〕翻刻と研究』（白百合児童文化センター叢書 慶応義塾大学出版会 1998刊）である。所長桑原教授の退職記念として刊行された同書は、396頁、図版2枚、26cmの圧倒されるもので、1958年から続く桑原教授と巖谷栄二氏の関係について、研究史に沿った説明があり、コ

^Eたけだ・おさむ／文献情報課長

ピーは「平成元年頃、白百合女子大学の宮崎芳彦さんは巖谷栄二さんの夫人貞子さんをお願いして、小波日記全冊のコピーを取ることをお許し頂いた。」ものであることが書かれている。

内容は、翻刻篇、研究篇に、事項索引、人名索引が付されている。

翻刻篇は、明治20年～27年の日記がほぼ完璧に解説されている。表記・配列は『明治文学全集 20』（筑摩書房 昭和43刊）の追込み式ではなく、原本のままで、これは私達の方法と一致するところで意を強くするものであった。

研究篇は「研究会のメンバーが小波日記を年ごとに分担し、それぞれの専門分野や興味関心に従って調査、研究した成果」が、まとめられている。日記に書かれたことの裏付け又、逆に日記によって文壇関係を検証することで、明治20年初期の文学史となっている。加えて、詳細な索引は研究のキーワードとして効果をあげるものと思われる。

今後の解説作業は、猪狩先生を主とした「小波日記を読む会」に継承されて、一緒に読むよう誘われた。その緻密な仕事を見て、私達の入る余地があるかと当初は怯むおもいだったが、2号に発表した作業が難しかった一方、楽しく過ごせたことを考え落合、奥村との3名で参加させてもらうことにした。

10月末現在、明治28年1～6月分を読み終えて調整中である。此の部分は明治大学のマイクロ資料で欠になっており、所蔵資料の補完につながるようになった。

発表の方法などは、追い追い話し合っていくことになると思われる。『図書の譜』への掲載の順がまわってくることを願っている。

